

今学期は2か月間に渡って北九州 YMCA で実習をさせていただきました。教案作成から教壇実習まで体験し、その中で戸惑うこと、悩んだこと、嬉しかったことなど、いろいろな経験をしました。その感じたことから見えた自分自身の変容やこれからの抱負を述べていきます。

まず、前期は中国からの留学生2名に対して授業を行いました。そのときに一番に感じた自分の変化は、「教えることに抵抗がなくなったこと」です。前期の留学生への日本語授業では、説明するときは教材や黒板を使って説明し、伝わりやすいように、また学習者の表情をうかがえるように、体を学習者に向け目を見るように意識しました。そうすることで、苦手だった教えることに抵抗を感じるものがなくなりました。そして今回の実習でも、それらのことを意識して授業を行うことができたと思います。事前に準備していたこともありますが、説明することに不安になることもなく、学習者に教えることが楽しく感じました。今回の実習は心に余裕を持って臨めていたと思います。

「私の日本語教育哲学」で述べた授業で重要なことは、「教室の雰囲気作り」と「考えさせる授業をすること」、「学習者の意見を取り入れる」の3つでした。「教室の雰囲気作り」では、間違えてもいい雰囲気を作ることが大切だと考えました。それに加え、今回の実習を通して、学習者の気持ちを盛り上げる工夫も大切だと感じました。授業が退屈であると、どうしても寝てしまう学習者が出てきます。私も実習中、その状況を経験しました。そのときの授業の内容は、会話文を繰り返し読むことでした。YMCAでの授業見学を思い返すと、N先生は表情が豊かで、体で合図や表現をし、表情があるような声で、とても授業に引き付けられました。それも教師の「教室の雰囲気作り」の一つだと感じました。「考えさせる授業をすること」では、一方的な授業にならないよう、問題を解いたり、コミュニケーションを取り入れたりする授業をするべきだと述べていました。実習を終えて、このことは大切であると実感しました。実際に私は問題を解かせてみて採点も行いました。学習者の回答を見てみると、一人一人間違っているところが違って、この学習者はこの部分が苦手なのかもしれない、と分かることがありました。また、コミュニケーションを取り入れることも、文法の使い方を確認することができ、学習者の発言によって学習者全員が新しい知識を得ることができたりするため、この考えは変わりません。「学習者の意見を取り入れる」では、学習者の意見を聞いて授業を構成し、できるだけ学習者の要望に応えた授業をしたいと述べました。実習でのディスカッションでYMCAを卒業したあとどうするか聞いたところ、母国に帰るといふ学習者もいれば、日本に残りたいという学習者もいました。一人一人考えが違ってくるのがわかりました。今回は実習ということでその取り組みはできませんでしたが、もし私が教師という立場に立ったならば、学習者の将来像を知った上で授業をしていきたいと思っています。

今学期の実習では、さまざまな戸惑いや困惑を経験しました。これからその経験からの意識変化などを挙げていこうと思います。

10月31日の一回目の実習では、Tさんと本の問題を担当しました。初日ということで、

とても緊張していたことを覚えています。また、今までの大学の授業で日本語教育の授業での発表などでは全員が知り合いで、前期の実習は学習者二名だったので、20名のまだよく知らない大人数の学習者にこちらを見られていること、そして学習者の初めの挨拶の声の大きさに圧倒されました。この授業では、自分で作成したプリントを解いてもらいました。プリントには、「あなたのことを教えてください」という欄を作っていましたが、そこに戸惑う学習者が多く、設定していた時間通りにいきませんでした。そのときは最後の余った時間を使って解かせることにしましたが、私はこのようなことが起きた時のことを考えていなかったで、とても焦りました。このことから、次回からの授業の教案を考えるときは、時間通りにいかないこともあるということ considering、教案作成に取り組むようになりました。

11月26日の2回目の実習では、漢字を担当しました。二限が終わる五分前くらいに漢字の授業を始め、そのタイミングで問題を解いてもらいました。休み時間に入ったときに問題を解くのをやめてもらい、三限目で続きを解き、時間が余った学習者には追加でプリントを解いてもらう予定だったのですが、休み時間に問題を解く学習者も数名いて、三限目に入ったときに進んでいる学習者と進んでいない学習者の差が大きくなっていました。その結果、することがなく暇そうにしている学習者が何人かいて戸惑いました。教案通りに進めるにはこのようなことも見据えて問題を解かせたり、プリントを配ったりしなければならないなと思いました。

12月12日、最後の実習では、Tさんと会話を担当しました。ここで私が困惑したことは、学習者の発言に反応することです。私は駐車違反の紙を提示しました。すると学習者の一人が、「それください!」と言ってきました。私は何と答えればよいかわからず、笑いかけてその場を終えてしまいました。後から横溝先生に、「この場合、その紙を渡して、罰金15000円ください、という返しもよかったかも」とアドバイスをいただきました。このことを振り返って、学習者とのコミュニケーションを楽しめば、会話も続けることができたのではないかと考えました。日頃からいろいろな人との会話を楽しんでコミュニケーション力を高めていこうと思いました。

今回、教案作成、教材準備、マイクロティーチング、教壇実習という過程を体験しました。この過程でも悩むことが多くありました。まず、教案作成では、説明は短い文で簡単にわかりやすくしなければならないことです。私は聖徳太子を知っているか尋ね、それについて説明したかったのですが、短い文で簡単にわかりやすく説明するのが難しく悩みました。それから、授業が時間内に終わるように調整して、時間が足りなかったとき何を省くか、また時間が余ったとき何をするか、ということを考えるのが大変だと感じました。教材準備では、悩むというより、気を付けたことが多かったです。例えば字や絵カードの大きさ、分かりやすい絵の選択、文章に空欄を作るときはなるべく重要だと思う単語やフレーズを選ぶことなどです。教壇実習では、教案通りにいかないことが多く悩みました。時間が余ったり、考えてなかったことが起きたり、そのときどう対応するか瞬時に考える力が必要だなと感じ

ました。また、私は次に行くことや言わなければならないことを忘れてしまい、授業に少し間ができることもありました。テンポ良く授業を進めるには、教案をしっかりと頭に入れておかなければならないことが分かりました。

ここまで、今学期の実習での戸惑いや悩んだことなどを述べてきましたが、嬉しかったこと、自分自身の進歩を感じることもありました。まず嬉しかったことは、配った問題プリントを回収した時に、「授業の内容が面白くて、もっと知りたいと思った」というようなことが書かれていたことです。どうしたら興味を持ってくれるか、どうしたら伝わりやすいか、と考えて教案や教材を作成したので、とても嬉しかったです。それから私が説明したことに対して、分かったという表情をしたり、驚いたり、学習者のいろいろな表情を見ることができたことも嬉しかったことの一つです。自分が伝えたいことが伝わったと分かったとき、興味を持ってくれたときは、とても嬉しく、この経験ができて良かったなと思いました。

次に進歩したことです。私はこの実習を経験するまで、人の目を見て何かを伝えることが得意ではありませんでした。最後の授業を見ると、学習者の目を見て問いかけたり説明したりが、恐れずできるようになったと感じました。また、私は元々人前に出ることが苦手で、そのようなことを避けてきたこともありました。今回の実習で自信を持って人前に出て何かを伝えるということができていたことが、私の中で一番の成長です。横溝先生や実習生のみんながいたから成長できたのだと思います。そして、最初は学習者を少し恐れていたこともありましたが、実際話してみると全員フレンドリーで、日本語で頑張って伝えようとしてくれました。こちらも頑張って教えようと思い、授業が成り立つのは学習者のおかげだと感じましたし、横溝先生が「学習者は仲間」と言っていた意味がとてもよくわかりました。私は日本語教師を目指すか悩んでいます。日本語教師はとても魅力的だと思いました。もし私が日本語教師になったら、「嬉しかったこと」で述べたように、学習者がもっと知りたいと思うようなことを取り入れながら、学習者とのコミュニケーションを楽しむことを大切にしたいです。日常生活でも、たくさんの人と会話することを楽しみ、人前に出ること挑戦したいと思いました。